

都市史研究

THE URBAN HISTORICAL SOCIETY OF JAPAN

VOL.

64

2010
0531

青葉繁れる好季節を迎え、皆さまますますご健勝のこととお喜び申し上げます。本年度最初の都市史研究会ニューズレター64号をお届けいたします。本年度も三倉葉子が編集を担当いたします。どうぞよろしく願いいたします。

本号では2010年1月に開催されたラウンドテーブル「18世紀の都市と出版業——ロンドンと江戸——」、3月に行なわれた年度末合宿での研究報告の様子をお伝えいたします。また、今後の都市史研究会の活動予定と出版物のご案内も掲載いたします。さらに、都市史研究センターで事務局を担当していただいている坪内綾子氏が今春より研究に復帰されたことを機に、エッセイをご執筆いただきました。

ラウンドテーブル「18世紀の都市と出版業——ロンドンと江戸——」

2010年1月14日、東京大学法文1号館317番教室においてジェイムズ・レイヴン氏（エセックス大学歴史学部教授）をお招きしてラウンドテーブルが開催されました。ジェイムズ・レイヴン氏からは近世ロンドンの書籍取引に関する報告が行なわれ、浅野秀剛氏（大和文華館館長）にコメントを担当していただきました。当日は多くの参加者にめぐまれ、活発な議論が行われました。以下に参加記を掲載します。

参加記

今回のラウンドテーブル「18世紀の都市と出版業」は、エセックス大学歴史学部（University of Essex, department of history）のジェイムズ・レイヴン教授を招いて行われた。多岐にわたる研究分野に意欲的に取り組んでいるレイヴン教授であるが、中でも今回のテーマである18世紀ロンドンの出版業（Book trade）は教授が長年情熱を注いで研究を進めてきたものである。ラウンドテーブルはレイヴン教授の報告「ジョンソン博士のフリート街とロンドン—18世紀の出版業—」に始まり、大和文華館の浅野秀剛氏が江戸の絵本の流通に関する紹介を行い、続いて質疑応答が行われた。18世紀イギリス史は筆者の専門とするところではないが、当日の報告と質疑応答の様子を簡単に紹介したい。

舞台となるフリート街（Fleet Street）はロンドン中央部の



ラウンドテーブル当日の様子

街であるが、“Fleet Street”を辞書で調べれば「ロンドンの新聞（界）」という意味も持つことがわかるように、言論の中心地でもあった。しかしその要となる出版業について、産物たる出版物（本）は多いが、そのプロセスにはいまだ不明な点が多い。これらを踏まえ、今回のレイヴン教授の報告は文人であり著名な編集者でもあったサミュエル・ジョンソン（Samuel Johnson, 通称Dr. Johnson）を主人公に、まずはフリート街の街並み（sight）を再現し、当時の出版業の様相を分析していくというものであった。レイヴン教授がその主な史料として用いるのは当時の土地台帳である。台帳に記載された居住者名と賃料、納税額を参照すれば、誰がどの建物のどの部屋に住み、いつどこに引っ越したかというレベルまで詳細に検討することができる。ジョンソンをはじめとする出版業者たちは短期間で近隣を転々とし、その店舗を広げていく。またその店舗の周囲にはオリヴァ・ゴールドスミスら、著名な文人たちも多く住み、フリート街は言論・出版の中心地として発展していくのである。

レイヴン教授の報告に対しては、浅野氏がコメントに代えて、同時代の江戸の出版業の紹介を行った。浅野氏は特に絵本作家である大森善清と喜多川歌麿を例に挙げ、2人の作品とその出版・流通の方法を紹介した。著作権は江戸から大阪・京都と大都市を移動し、その出版の際に様々な変更が加えられる。また版木の移動に関しても、主板のみの移動が主であり、色板は著作権の譲渡先で新たに制作されるなど、合理的な方法が取られていたことが説明された。浅野氏のコメントの後は質疑応答が行われたが、中でもレイヴン教授が浅野氏に対し、日本近世の出版事情について非常に興味深く質問していたのが印象的であった。レイヴン教授の「版数や読者の数、またそれぞれの版が何部刷られたかはわかるのか」という質問に対しては、「それは全くわからない」。つまり西洋では活版での印刷であるが日本では木版印刷であるため、版木に物理的な限界があるので、精々何回というレベルまでしか判明しようがないということであった。一方西洋では、決められた部数を刷り終わったら活字を崩してしまう。版数や読者層は史料批判において非常に重要な材料となるが、それが判明していない以上、また違った基準が必要となるのであろうと感じた議論であった。

個人的な感想としては、フリート街の住宅区画を詳細に再現して当時の状況を分析するというレイヴン教授の研究のアプローチに大きな関心を持った。筆者の専門は近現代アイルランド史であるが、首都であるダブリンの研究には十分でない点も多い。特に出版業に関しても、ダブリンは非常に重要な都市である。しかし今回レイヴン教授が紹介したような手法をダブリン研究にも援用すれば、研究の膠着状態が打破されるかもしれないと感じた。そうした意味でも今回のラウンドテーブルは、研究上の着想をも得ることのできる、大変有意義なものであった。今後の継続的な開催を期待したい。

八谷舞（東京大学大学院人文社会系研究科）

2009年度年度末合宿

2010年3月8日、9日に2009年度の年度末合宿が行われました。今年度は修善寺温泉を会場とし、二日目に松田法子氏の案内による修善寺温泉街の巡見が行われました。当日は雪のちらつく天候ではありましたが、見学先のご好意もあり、充実した巡見となりました。また、一日目には杉森哲也氏による2009年度活動報告、吉田伸之氏・伊藤毅氏による2010年度以降の活動計画、森下徹氏・初田香成氏・武部愛子氏による研究報告、松田法子氏による巡見レクチャーといった内容に富む研究会も開催されました。今回は三本の研究報告の要旨をご紹介します。

報告要旨 萩・浜崎町における社会的結合の諸相

萩の町方史料については必ずしも調査が進んでいるわけではない。現在、比較的まとまった史料群として知られているのは、城下北端の浜崎町に伝来した2つの商家の文書である。一部ではあるが萩博物館で写真帳を利用できるので、報告でも主としてそれに拠りながら浜崎町における住人の社会的結合の様相を取り上げた。

浜崎町は本町と新町とからなり、北東部には港があつて御船倉や浜崎番所など藩の施設もおかれていた。また17世紀初めに勧請された住吉社があつたし、北西部には重臣クラスの蔵屋敷も建ち並んでいる。このうち本町筋には廻船問屋が軒を並べ、かれらが町年寄を輪番で務めていた。それに対して本町周縁部や新町には民衆世界が展開しており、さまざまな職業をみいだせる。そうしたなかにあつて、まとまった人数からなる上荷乗と仲師は、それぞれが公認された仲間を有し、住吉祭礼では神輿の「守護」をするなど、民衆世界の核ともいえる存在だった。このほか魚糺場に集う魚問屋や魚商売、船大工および石工の結合もあつた。港町であることから、こうした独特な民衆世界が発達していた。

これら住人の結合と町の枠組みとの関係についてはつぎの特徴を指摘できる。本町、新町それぞれにおかれた町年寄が担当したのは藩の御用が中心であり、これ以外に存在した住人の共同経費というべきものは、家持だけではなく総竈として負担されていた。そこからすれば、町屋敷所有者だけではなく、店借も含めた住人による共同性が存在したことになる。この徴収に直接あつたのが月行司であり、おそらくそれが契機となつて地位の株化もみられた。支配の枠組みとしての町とは独自の位相で住人の共同性が存在し、社会的結合を育んでいたことになる。

森下徹（山口大学）

報告要旨 戦後東京におけるマーケットの族生と変容

マーケットとは複数の店舗が連なつた長屋型の商業施設を指す用語で、とくに終戦直後には闇市として現れた。本発表ではこの戦後東京のマーケットに着目し、通時的にその全体像に迫ろうとした。とくにこれまで知られていなかったマーケットの全数調査や各地の施設の記念誌、当時の営業者へのヒアリングなどを通じて、それが存在する背景となる空間や社会のありようまでを明らかにした。先行研究では闇市は戦後の一時期に特有の非日常的な空間として捉えられがちだったのに対し、この前後に存在した商店建築類型との類似性やその存立基盤を示すことで、都市建築史、商業建築史の観点から一種、日常的な空間として捉え直すことを試みたものである。そして、以上の作業を通じて、マーケットが姿を変えつつも、その特性は継続し、現在の東京の都市空間を大きく規定していることを指摘した。質疑応答では、まず「おわりに」でのマーケットの位置づけについて、商店建築の全体像を視野に入れた、より厳密な評価の必要性が指摘された。また伝統都市の商店や商人に関する先行研究の成果との連続性が指摘され、マーケットの直前・直後だけでなく歴史的にさかのぼって論点化すべきとの意見が出された。そして、そこでの権利関係やテキヤのような存在が、戦後、どのように変容し、かつ生き延びていったかについてや、戦前のマーケットの実態など、今後の研究の可能性が指摘された。いずれも発表者の今後の研究の指針となるような指摘であり、さらなる研究を進めていきたいと考えている。

初田香成（東京大学）

報告要旨 逸身家文書について

大坂両替商逸身家文書は、東京大学大学院人文社会系研究科西洋古典学教授逸身喜一郎氏（2010年3月に定年退職）の元に残された大坂の両替商（銭屋佐兵衛、銭屋佐一郎）・逸身銀行に関する史料群（2300点程度）である。逸身家文書は、2003年秋に逸身喜一郎氏により「発見」されたのち、04年6月に東京大学へ搬出され、これまで6次にわたる現状記録調査、2次の聞き取り調査、3次の研究会を行ってきた。そして6年弱の月日を経て、2010年3月末に「大坂両替商逸身家文書現状記録調査報告書」（ぐるーぷ・とらっど3発行）という形で1冊の報告書にまとめることができた。

2010年3月8日のとらっど3合宿における研究報告の場では、その編集最終段階における「解題」の執筆内容報告という形をとった。そのため、以下では逸身家文書についてごく簡単に紹介することで、報告要旨とかえさせていたたく。

逸身家文書の中心を占めるのは、逸身家の経営史料と、当主および家族の婚礼関係史料である。この他に、当主佐兵衛が、居町である石灰町の年寄をつとめたさいの記録が、わずかではあるが確認できる。

逸身家文書には、銭屋佐兵衛が開店した延享元（1744）年以後の経営帳簿が残り、さらに天保8（1837）年に開店する備後町の佐一郎の経営帳簿が加わって、明治34（1901）年の逸身銀行の任意解散の時期まで連綿と残されている。そのため、両替商としての成長、さらに幕末維新时期という激動の時代を経て銀行経営に至る道筋を、具体的に知ることができる。また、婚礼関係史料の中には、4代佐兵衛妹の嫁ぎ先である京都丹後縮緬問屋の野々口（丹後屋）市郎右衛門の関連史料が50点程確認できるなど、大坂・京都・貝塚・吉野などに広がる親類とのやりとりを詳細に知ることができる。

この多彩な内容を有する逸身家文書について、2010年4月からは逸身家文書研究会（2nd stage）が発足され、新たな共同研究も始まった。数年後に、共同研究の成果を公表できるよう、今後もさらに理解を深めていきたい。

武部愛子（東京大学）



「大坂両替商・逸身家文書現状記録調査報告書」

内容：巻頭グラビア/目次/序言/史料ノート：①逸身家文書の住友関係史料（海原亮）②文化14年の御用金（若山太良）③別家・銭屋市兵衛と奉公人（松田暁子）④銭屋佐兵衛と石灰町（吉田伸之）⑤「天照皇大神宮御降臨諸事扣」からみる銭屋の社会的関係（竹ノ内雅人）⑥逸身家文書から見た維新时期通商司政策（小林延人）/史料紹介：「土佐用日記」（小林延人）/付録：東京大学法学部法制史資料室所蔵「大坂石灰町人諸届書」史料細胞現状記録/逸身家文書・史料細胞現状記録/現状記録調査の概要（武部愛子）/逸身家文書・解題（武部愛子・小林延人）/逸身家文書解説・逸身家文書と銭佐ならびに逸身家（逸身喜一郎）

（268p,2010年3月ぐるーぷとらっど3発行）

次回都市史研究会例会開催のご案内

2010年6月9日に第72回都市史研究会例会として、吉田光男氏（放送大学）の著作を取り上げて書評会を開催いたします。今年度最初の都市史研究会例会となります。皆さまふるってご参加ください。

内容 吉田光男著『近世ソウル都市社会研究—漢城の街と住民—』（草風館、2009）書評会

日時 2010年6月9日（水）19時～21時

場所 東京大学本郷キャンパス 工学部1号館3階315番会議室

評者 石田潤一郎氏（京都工芸繊維大学）

コメンテーター 伊藤裕久氏（東京理科大学）

金銀真氏（東京大学東洋文化研究所客員研究員）

ラウンドテーブルおよび研究集会開催のご案内

2010年8月19、20日にぐるーぷ・とらっど3および飯田市歴史研究所の共催によるラウンドテーブルが開催されます。ぐるーぷ・とらっど3では2006年度以来、日本とフランスの伝統都市をめぐる比較類型把握を試み、フランス国内の研究者とも研究交流を行ってまいりました。その研究交流・共同の新たな段階としてフランス都市史を代表する研究者をお招きし、ぐるーぷ・とらっど3のメンバーと議論を行います。さらに21、22日には飯田市歴史研究所主催による研究集会も開催されます。皆さまふるってご参加ください。

ラウンドテーブル「伝統都市の比較史」

会場：飯田信用金庫 大会議室（長野県飯田市本町1-2）

8月19日（木） 9:00～17:00

セッション1 問題提起

高澤紀恵氏（国際基督教大学）

都市を比較する

吉田伸之氏（東京大学）

小規模伝統都市論

柱Ⅰ 小規模伝統都市論—飯田とシャルルビル・メジエール

セッション2 移動

フランソワ・ルジウ氏（パリ第4大学）

シャルルビル・メジエール

竹ノ内雅人氏（飯田市歴史研究所）

飯田

セッション3 空間

ユリ・カルボニエ氏（アルトワ大学）

シャルルビル・メジエール

江下以知子氏（東京大学）

飯田

8月20日（金） 9:00～17:00

柱Ⅱ 伝統都市の周縁

セッション4 芸能

メラニー・トラベルシェ氏（リセ・ヴィクトルユゴー校）ナポリ

吉田ゆり子氏（東京外国語大学）

飯田

セッション5 周縁

アラン・ティレ氏（リセ・アンリ4世校）

パリ

塚田孝氏（大阪市立大学）

大坂

セッション6 総括討論

総括コメント 伊藤毅氏（東京大学） ほか

総合司会＝ギヨーム・カレ氏（フランス極東学院）、森下徹氏（山口大学）

通訳＝竹下和亮氏（国際基督教大学） ほか

お問い合わせ先： 都市史研究センター・とらっど3事務局

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学文学部日本史学研究室 Email: trad3@l.u-tokyo.ac.jp

飯田市歴史研究所 研究集会

会場：飯田信用金庫 大会議室（長野県飯田市本町1-2）

8月21日（土） 13:00～17:00

伝統都市を比較する ―飯田とシャルルビル・メジエール―

講演1：吉田伸之氏（東京大学）

飯田城下町の形成過程

講演2：フランソワ・ルジウ氏（パリ第4大学）

シャルルビル・メジエールの都市アイデア

コメント：伊坪達郎氏（飯田市立上郷小学校）

ギヨーム・カレ氏（フランス極東学院）

質疑応答

8月22日（土） 13:00～17:00

午前：「飯田・上飯田―近世から現代へ」

多和田雅保氏（横浜国立大学）

田中雅孝氏（長野県松川高等学校）

ほか

午後：個別研究報告

長野県飯田高校図書委員会 「飯田高校110年史」

原英章氏（飯田市歴史研究所市民研究員）

ほか

お問い合わせ先： 飯田市歴史研究所（IIHR）

〒395-0002 長野県飯田市上郷飯沼3145 飯田市上郷自治振興センター庁舎2・3階 Email: iihr@city.iida.nagano.jp

『伝統都市』（全4巻）出版のお知らせ

2010年5月21日より『伝統都市』（全4巻、東京大学出版会）の出版が開始されました。2006年から2007年にかけて、都市史研究会例会で準備報告会を行ってまいりましたが、その成果が遂に出版される運びとなりました。吉田伸之・伊藤毅を編者として、全4巻で構成されています。パンフレットより内容紹介と目次を転載いたします。また、本ニューズレター読者を対象といたしまして、各巻税込予価5040円より2割引でご購入いただける注文書を9ページに掲載いたしております。是非ご活用ください。

伝統都市1 アイデア（2010年5月刊行）

都市の社会=空間は、意識されるか否かによらず、つねに特定のアイデアにもとづいて企画され、また改造される。宗教コスモロジー、公権力の構造理念、市民的あるいは階級的な共同の観念・ユートピアなどが伝統都市には積層し、せめぎあう。本巻では、伝統都市を解読するキーワードとして〈アイデア〉を積極的に位置づけ、都市の社会=空間に重層するアイデアの解読、アイデアの担い手と実行主体、そして現代都市アイデアによる解体と相剋から、都市アイデアを浮かびあがらせる。

目次： 序 方法としての都市アイデア 伊藤毅（東京大学）

I ひろげる

- 1 移行期の都市アイデア 伊藤毅
- 2 地中海都市 陣内秀信（法政大学）
- 3 都市図屏風とアイデア 杉森哲也（放送大学）

II 考える

- 1 豊臣秀吉の京都改造と「西京」 三枝暁子（立命館大学）
- 2 萩城下の都市民衆世界 森下 徹（山口大学）

- 3 幕末・明治初期の横浜 青木祐介（横浜都市発展記念館）
- 4 近代移行期の東京 松山恵（明治大学）
- 5 社会主義の都市アイデア 池田嘉郎（東京理科大学）

III さぐる

- 1 開京 禹成勲（七宝建設）
- 2 バスティアード 加藤玄（日本女子大学）
- 3 町家 高村雅彦（法政大学）
- 4 与板 朴澤直秀（岐阜大学）
- 5 オラン 工藤晶人（大阪大学特任研究員）

伝統都市2 権力とヘゲモニー（2010年5月刊行）

伝統都市における支配権力や社会的権力、あるいはヘゲモニー主体の具体相をとりあげ、社会的結合論の視点から都市権力論の方法・論点をさぐる。都市の権力は、都市を基盤とする広域支配を担う権力機構、都市内行政の権力主体、社会レベルにおける私的権力のヘゲモニーなど多義的である。本巻では、個別的な都市事例を素材とし、狭義の権力構造から、権力の空間、都市社会の統合と秩序化の諸局面、および社会との相剋、移行期における変容・変革などの問題にせまる。

目次： 序 都市の権力とヘゲモニー 吉田伸之（東京大学）

I ひろげる

- 1 武士と都市 五味文彦（放送大学）
- 2 都市法 塚田 孝（大阪市大学）
- 3 革命前夜のベルリン 山根徹也（横浜市大学）

II 考える

- 1 アテナイ民主政の警察機能と市民 橋場 弦（東京大学）
- 2 君主制フィレンツェの都市改造 野口昌夫（東京芸術大学）
- 3 都市周縁の権力 高橋慎一郎（東京大学）
- 4 解体される権力 横山百合子（帝京大学）
- 5 近代中国の租界 吉澤誠一郎（東京大学）

III さぐる

- 1 バグダード 清水和裕（九州大学）
- 2 ペテルブルク 青島陽子（ITP派遣生）
- 3 長岡と蔵王 武部愛子（東京大学学術支援職員）
- 4 軍都金沢 本康宏史（石川県立博物館）

伝統都市3 インフラ（2010年7月初旬刊行予定）

都市を巨大な人工物とみたとき、都市の骨格をなす道路や橋、河川・運河・水路などの基幹施設、都市生活の生命線となる上水道や燃料、不断の管理によって都市機能を維持する塵芥や下水の処理などが有効に稼働していることが要求される。本巻では、都市を物的に成り立たせているさまざまな局面に焦点を当て、その全工程、それを担った社会集団を念頭に置きながら、インフラのもつ空間的・社会的意味を伝統都市のなかに探り、その近現代の変容の諸相を描く。

目次： 序 都市インフラと伝統都市 伊藤 毅（東京大学）

- I ひろげる
 - 1 運河都市 鈴木博之 (青山学院大学)
 - 2 近代市街橋のデザイン 篠原 修 (政策研究大学院大学)
- II 考える
 - 1 古代都市街路 伊藤重剛 (熊本大学)
 - 2 城下町 岩本 馨 (京都工芸繊維大学)
 - 3 藩邸 岩淵令治 (国立歴史民俗博物館)
 - 4 寺内 杉森玲子 (東京大学)
 - 5 都市再開発 初田香成 (東京大学)
- III さぐる
 - 1 道 宇佐見隆之 (滋賀大学)
 - 2 穴蔵 谷川章雄 (早稲田大学)
 - 3 ニューゲト監獄 栗田和典 (静岡県立大学)
 - 4 高輪海岸 吉田伸之 (東京大学)
 - 5 不動産 森田貴子 (早稲田大学)

伝統都市4 分節構造 (2010年8月初旬刊行予定)

都市における社会=空間構造の基盤を構成するのは多様で個性的な社会的結合体である。伝統都市において、血縁・地縁・職業・宗教・文化などのさまざまな契機によって形成される諸集団が、相互に複層的な関係をもつことによって生みだされる単位社会のあり様を抽出し、その分節的な社会=空間構造の特質について具体的に考察する。そして、伝統都市間の類型的比較を試み、あわせて、近代への移行期における分節構造の変容過程の特質を明らかにする。

目次： 序 ソシアビリテと分節構造 吉田伸之 (東京大学)

- I ひろげる
 - 1 江戸・内・寺領構造 吉田伸之
 - 2 聖俗の結合 近藤和彦 (東京大学)
 - 3 都市空間の分節把握 伊藤裕久 (東京理科大学)
- II 考える
 - 1 中世ジェノバの「家」 亀長洋子 (学習院大学)
 - 2 近世パリの街区 高澤紀恵 (国際基督教大学)
 - 3 胡同と排泄物処理システム 熊遠報 (早稲田大学)
 - 4 近世湊町と地域特性 吉田ゆり子 (東京外国語大学)
 - 5 明治初年の遊廓社会 佐賀 朝 (大阪市立大学)
- III さぐる
 - 1 ミドルマン 岩間俊彦(首都大学東京)
 - 2 ベリンダ 飯島みどり (立教大学)
 - 3 社家 竹ノ内雅人 (飯田市歴史研究所)
 - 4 浜人 山下聡一 (大阪市立大学GCOE特別研究員)
 - 5 囃子方 佐藤かつら (鶴見大学)

『伝統都市』注文書

A5判/上製カバー/縦組/平均320頁/各巻税込予価5040円より2割引 (4032円)

シリーズの特色

- “伝統都市”とは何か、著しい飛躍を遂げた都市史研究の到達点を示す。
- 現代都市が抱える問題の解決の糸口を歴史的根源からさぐる。
- 4つのキー概念によって時代と地域を横断し、都市と社会を読み解く。
- 日本・アジア・欧米をフィールドとする第一人者が都市を通して歴史の魅力を描き出す。

ご注文方法

- 郵便、ファックスまたはメールからご注文いただけます。
- 郵便またはファックスをご利用の方は、このページの「ご注文内容」「お客様情報」をご記入の上、郵便の場合は都市史研究センター・とらっと3事務局へ、ファックスの場合は東京大学伊藤研究室までお送りください。
- メールにてご注文される方は「ご注文内容」「お客様情報」を下記Emailアドレスまでお知らせください。

都市史研究センター・とらっと3 事務局

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 日本史学研究室内

Email: trad3@l.u-tokyo.ac.jp

Fax: 03-5841-7459 (東京大学工学部建築学科伊藤研究室)

注意事項

- 送料はお客様に実費ご負担いただきますのでご了承ください。
- お支払は商品と同封する振込用紙にてお願いいたします。
- 公費でのお支払にも対応させていただきます。商品の郵送時に必要書類を同封いたしますので、「公費払い用書類の宛名」に書類に記載する宛名(大学名など)をご記入ください。
- ご注文いただいた内容は、毎週金曜日に取りまとめて東京大学出版会に連絡いたします。そのため、商品がお手許に届くまでお時間を頂戴する場合がございます。どうぞご了承ください。

ご注文内容

- ・全4巻申し込みます (セット)
- ・1 アイデア ISBN 978-4-13-025131-0 (冊)
- ・2 権力とヘゲモニー ISBN 978-4-13-025132-7 (冊)
- ・3 インフラ ISBN 978-4-13-025133-4 (冊) 2010年7月以降のお届けとなります。
- ・4 分節構造 ISBN 978-4-13-025133-1 (冊) 2010年8月以降のお届けとなります。

お客様情報

ご芳名

ご所属

お届け先ご住所 〒

電話番号 ()

公費払い用書類の宛名(公費払いをご希望される方のみ)

奈良町と春日信仰

坪内綾子（日本女子大学）

近年、平城京遷都千三百年に向けて開発が進められてきた奈良は、記念となる今年に至って大々的な行事が営まれ、観光ブームになっている。日頃南都を研究対象として見ている身としては、嬉しくもありふってわいたブームに少々の戸惑いもありといった複雑な心持ちなのだが、近頃出版されている雑誌の奈良関連記事には奈良町をはじめとして観光地化されていない奈良の素朴さを紹介するような内容が増えていて、話題の大極殿にも行きたいけれど、静かな町並を見ながらゆっくり散策もしたいという両方のニーズに合うようである。

今回は実態の捉え難い奈良町を在地で行われた信仰という側面から眺め、研究余滴としたい。南都へご旅行される方の葉となれば幸いである。

奈良町の形成

近鉄奈良駅の脇から商店街を抜け、一本・二本と路地を入れていくと、早くも中近世の雰囲気の色濃く残した町並みが見える。春日大社参道に繋がる三条通に面した猿沢池以南、元興寺境内跡を中心とした旧市街地一帯が奈良町（現在は「ならまち」とも表記される）と呼ばれているが、これは小規模な町の集合体を総称したものであって、行政的に奈良町という地名はない。

もともとは東大寺・興福寺・春日社などの大寺社の課役を行う門前郷に端を発するこの地域は、戦火の度に伽藍の復興などを通して発展を遂げ、南都七郷などと呼ばれた。更に十五世紀頃、元興寺が度重なる火災で伽藍の多くを焼亡すると、その境内地を浸食するような形で拡大していった。

争乱が鎮まった安土桃山期には豊臣秀長によって奈良代官が設置され奈良諸郷の支配が行われるようになる。その後の慶長年間、幕府成立時に行われた町切りによって郷は町として百に区画され、これを総称して奈良町と呼んだ。奈良代官の職掌は奈良奉行所に引き継がれ、奈良町が幕府直轄となると、周辺の村なども奈良町に組み込まれて次第に拡大し、ピーク時には二百を越える町があったという。

奈良町の産業が晒や墨、酒造など寺社との結びつきの中で興ったように、町の発展は信仰という側面なしには語れない。とりわけ大和国一宮でもある春日社への崇敬は篤く、春日にまつわる種々の神仏事が営まれた。

春日信仰

奈良町の信仰の紐帯である春日社の創建は神護景雲二年（768）頃とされる。以来、藤原氏の氏社として信仰を受け、春日祭や若宮祭を中心として多くの神仏事が催されてきた。

春日祭は申祭とも呼ばれる例祭で、嘉祥三年（850）頃に創始したとされる。氏神祭祀として氏人が多く参列したほか、官使である近衛使などによって官幣が捧げられ舞楽が奉納されるなど、藤原氏を中核とする公家社会をあげて行われた大祭であった。明治以降に勅祭となった同祭は現在氏人の参仕は見られず、勅使が行粧をなして参向し、大宮本殿前の林檎の庭にて奉幣や舞楽が行われる。我々見物客は、行列を眺めた後は南門の外からその次第を垣間見るに過ぎず、氏神祭としての性格が失われた今においても、他氏を交えず行われてきたというその閉鎖性は受け継がれているようである。

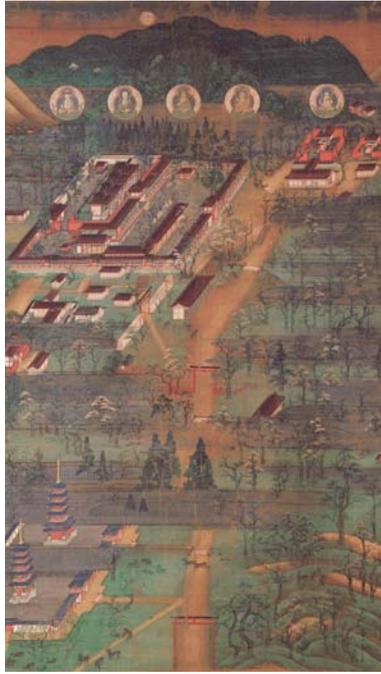
対して若宮祭は、春日祭への参仕が叶わない興福寺を中心として大和国を挙げて行われた大祭で、保延二年（1136）の創始以来、田楽・流鏑馬などの呼び物をはじめ種々の風流が催されて芸能の発展に寄与した。

この外日常的に行われる日並・旬御供に至るまで大小様々な年中行事が営まれてきたが、次第に社外においても春日神に対する信仰が行われるようになる。古くから行われていたのは遙拝や小社勧請などで、春日詣が叶わない在京の貴族らが自宅に居ながら礼拝する事を目的としていたが、より参詣に近い状態を再現すべく社頭の様子を図絵してこれを拝する対象とするようになった。『玉葉』寿永三年（1184）五月条には九条兼実が「被奉図絵春日御社一鋪」を取り寄せて堂内に安置し、威儀を調べて奉幣や心経の転読を行い奉拝する様が記される。このような礼拝は次第に各家で定着していったようで、「以春日曼荼羅因画社頭気色、以是号曼荼羅。、近年每人所持物也、擬社頭の儀、致供物等種々之儀、」（『花園天皇宸記』正中二年（1325）十二月廿五日条）という程に普及し、それに伴い春日曼荼羅と呼ばれるようになった春日社頭図も数多く作成された。

春日曼荼羅を用いた礼拝は貴族のみに留まらず、仏教社会にも波及していく。十三世紀前後には春日明神とその本地の功德を讃嘆した「春日講式」（これには、解脱房貞慶作・明恵房高弁作など諸説がある）が制作され、集会してこれを読誦し曼荼羅を掲げて礼拝を行う春日講（現在はシュニチコウと発音される）が修された。当初は藤原氏を出自に持つ皇貴族を発願主とし、興福寺僧の中でも貴種にあたる者を招請して行ったことが現存の講式諸本の奥書などから推察できるが、やがて講は興福寺内にも取り入れられるようになり、十五世紀終わり頃には衆徒が輪番で頭役を行う衆中春日講から各住房・在所で営まれるものまで様々な規模の講が行われた。更には仏教的色彩の強い行事でありながら春日社司中や神人層にまで伝播し、次第に大和各地の郷や町などへも裾野を広げていった。



「春日鹿曼茶羅」
(西城戸町所蔵)



「春日曼茶羅」
(南市町所蔵)

奈良町における春日講の諸相

前述のようにして広範な地域に及んだ春日講は、当然ながら春日社膝下の奈良町内でも各町で営まれた。町単位で講衆を形成して「某(町)春日講衆」などと称し春日講を催すのみならず、本殿での神楽奉納や若宮御祭での奉幣なども行っており、春日社を経済面からも下支えしていた。

町によっては現在も春日曼茶羅を所有し、或いは講そのものも継続して行っている。南市町(猿沢池南西)や東・西城戸町(元興寺西側)、北京終町(元興寺南西、JR京終駅近く)、更に南西にある東九条町などでは、図のような春日曼茶羅を各会所などで所有している。図様は境内や背に榊を立てた神鹿など様々であるが、春日の本地仏やそれを表す梵字などが描き込まれるものが殆どである。これを用いて講を行うのだが、例えば東城戸町では一月十一日を式日として町内の会所に集まって曼茶羅を掛け、法要と会食の後に春日大社へ参詣するという流れで現在も尚講を実施している。記録に残る各地の講でも、同様に集会して曼茶羅を本尊として掲げ、仏事を行った後に宴席が設けられて酒肴が振舞われるのであるが、こうした酒宴は中世から行われていたようで、「二條宴乗日記」には同日に各在所で催される春日講をハシゴし

ては大酒する様が記され(「をくの茶湯座敷ニツブレ申候、」という記事までである(!))、厳粛に営むべき神仏事というよりはむしろ地域内の結束を高める役割を担っていたと言える。

こうした講衆の存在は、春日社の石燈籠などにも多くその名を留めている。石燈籠は一の鳥居付近から諸末社に至る広い境内の参道両脇に数多建てられ、年二回(二・八月)の万燈籠の時期には本殿内の吊燈籠と共に燈火されて厳かな雰囲気醸し出す。これらはいずれも寄進によって建てられたもので、押上町(東大寺大仏殿西側)や木辻子町(今の東・西木辻町、元興寺西南)など奈良町内の春日講衆も銘文に名を残している。これらの燈籠は近世末期から近代にかけて震災で多く倒壊したというから、かつては中世以来の春日講中の寄進によるものが更に多く立ち並んでいた事であろう。



春日社境内、大宮と若宮を繋ぐ御間道に並ぶ石燈籠

奈良町は古い町並みとゆったりとした時間の流れを保ち現在に至るが、それは各講が徒な観光地化や乱開発を目指さずに町内の人々の繋がりや生活の営みを大切にする精神を養う場として機能していたからに他ならない。今尚見られる春日講の名残は、信仰を紐帯とした景観保存の可能性を探る素材としても注目しうるのではないだろうか。

〔附記〕

日頃は、事務局として大変お世話になっております。研究への復帰にあたり、このような執筆の機会を下さった吉田先生や運営メンバーの先生方をはじめ、研究会の皆様方に心より感謝申し上げます。今後ともどうぞ宜しくお願い致します。

News Letter 都市史研究 Vol. 64
2010年5月31日発行

事務局：〒113-0033 文京区本郷7-3-1 東京大学大学院人文社会系研究科日本史学研究室内
編集担当：三倉葉子（東京大学大学院工学系研究科建築学専攻）
レイアウト原案：岩本馨（京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科）